

学位授与番号：乙 3232 号

氏 名：道躰 隆行

学位の種類：博士（医学）

学位授与日付：平成 30 年 12 月 26 日

学位論文名：

Transgastric large-organ extraction: the initial human experience.

（経口的大臓器摘出法：臨床における初期経験）

学位論文審査委員長：教授 炭山和毅

学位論文審査委員：教授 鈴木直樹 教授 颯川晋

論 文 要 旨

氏 名	道躰 隆行	指導教授名	矢永 勝彦
<p>主論文</p> <p>Transgastric large organ extraction: the initial human experience (経口的大臓器摘出法：臨床における初期経験)</p> <p>Takayuki Dotai, Alisa M. Coker, Luciano Antozzi, Getlor Acota, Marcos Michelotti, Nikolai Bildzukewicz, Bryan J. Sandler, Garth R. Jacobsen, Mark A. Talamini, Santiago Horgan Surgical Endoscopy (2013) ; 27 : 394-399</p> <p>要旨</p> <p>【背景・目的】</p> <p>従来の腹腔鏡手術では切除臓器を腹壁のトロカー部位から摘出する。手術標本を腹腔内から取り出す際に同部位を切開・延長することになり、そのため創関連合併症の発症率が高くなる。この点で、臓器の摘出経路を経腹壁的ではなく経口的に行うことにより (TORE)、手術創の切開・延長を回避することができる。今回、摘出臓器が比較的大きなスリーブ状胃切除術において、従来法 (non-TORE) に対する TORE の優位性を検討した。</p> <p>【方法】</p> <p>2010年8月から2011年3月の期間に施行された18例のTOREと10例のnon-TOREにおいて、患者の性別、年齢、術前BMI、手術時間、在院日数、超過体重減少率、トロカー部位の創関連合併症を後ろ向きに比較した。</p> <p>【結果】</p> <p>TORE群の創関連合併症数は統計学的有意差をもってnon-TOREよりも少なかった。その他の項目に有意な差は見られなかった。</p> <p>【結論】</p> <p>スリーブ状胃切除術におけるTOREは臓器摘出部位の創関連合併症を減少させるといふ点において優れた手術法である。</p>			

学位論文審査結果の要旨

外科学講座 道躰隆行氏の公開学位審査は、審査委員 瀬川晋教授、鈴木直樹教授、また、指導教授 矢永勝彦教授臨席のもと平成 30 年 11 月 30 日に開催された。道躰氏の学位論文は、Surgical Endoscopy 誌に 2013 年に掲載された **Transgastric large-organ extraction: the initial human experience** と題した主論文一編により構成されている。なお、Surgical Endoscopy 誌の 2018 年の Impact Factor は 3.117 であった。

本研究では、病的肥満症に対する減量手術の一つである腹腔鏡下スリーブ状胃切除術 (Laparoscopic Sleeve Gastrectomy: 以下、LSG) において、切除前半に摘除した標本を、その後に摘除する残胃を開放することで経胃経口的に回収する **TransOral Remnant Extraction** (以下、TORE)法が開発された。公開学位審査会で道躰氏は、本手技の治療成績を同時期に実施された従来の経腹壁的回収法による LSG の成績と対比しながら研究の概略を解説した。具体的には、減量効果や術時間で従来法と差は認められなかったものの、TORE 群 18 例では全て経口的標本回収に成功し、ポート造設部の追加皮切の必要性や創部感染は認められなかったが、一方、非 TORE 群では標本回収に際し 4 例で追加の皮切を要し、うち 2 例で創部感染が認められたこと等を報告した。発表後の質疑では、術後合併症以外に手術に対する受容性など他の評価項目は検討されなかったか、肥満手術において標本採取を行う臨床的意義はあるのか、病的肥満症例の欧米と日本の背景因子の違いが適応や手技の有効性に影響を与えないか、軟性内視鏡と硬性内視鏡の視野の緩衝による弊害はなかったか、経消化管的手術を普及させるために軟性内視鏡に改善の余地はないか、経胃経口経路のみに想定される術中術後合併症はないか、胃癌罹患率の高い本邦で胃を開放する手技は癌細胞を撒布するリスクを伴うのではないかなど、多くの質問、コメントがあったが、いずれに対しても、道躰氏は自身の日米両国での豊富な臨床経験から得た知見を交え誠実かつ明確に回答した。その後、瀬川、鈴木両教授と慎重な審議を行い、本術式は道躰氏が所属していた研究チームが開発したもので主論文が世界で初めての臨床報告であることから、本研究の独創性・新規性は極めて高く、また、本研究が、病的肥満症に対する標準治療として本邦でも保険収載されている LSG において、整容性の改善のみならず術後合併症予防にも有用であることを鑑み、本研究が学位授与に値する極めて価値の高い研究であるとの結論に至った。